



共古日録

四十

東京
村西
井原
名
地



櫻

桃



共古日録
共古日録
共古日録

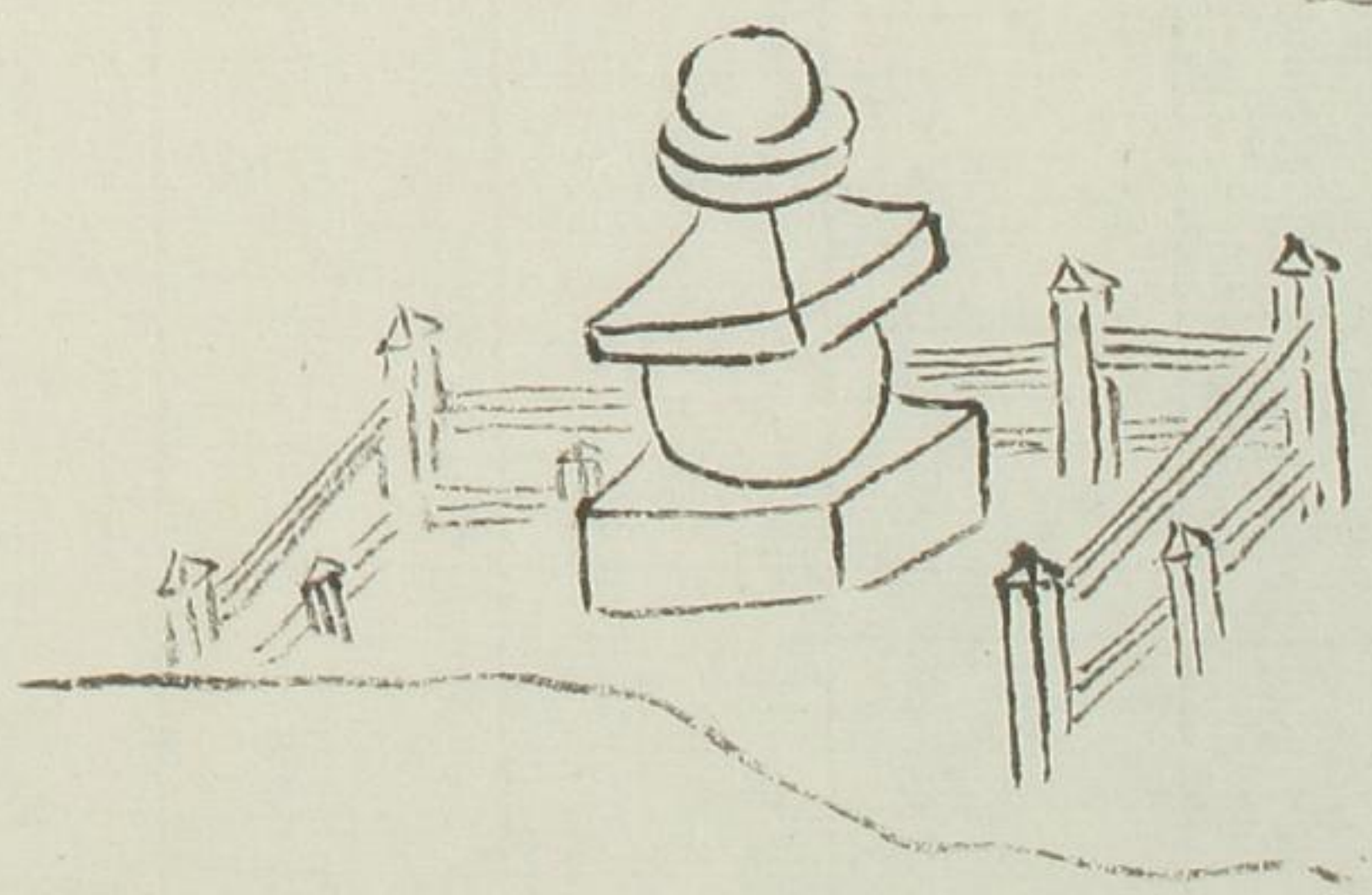
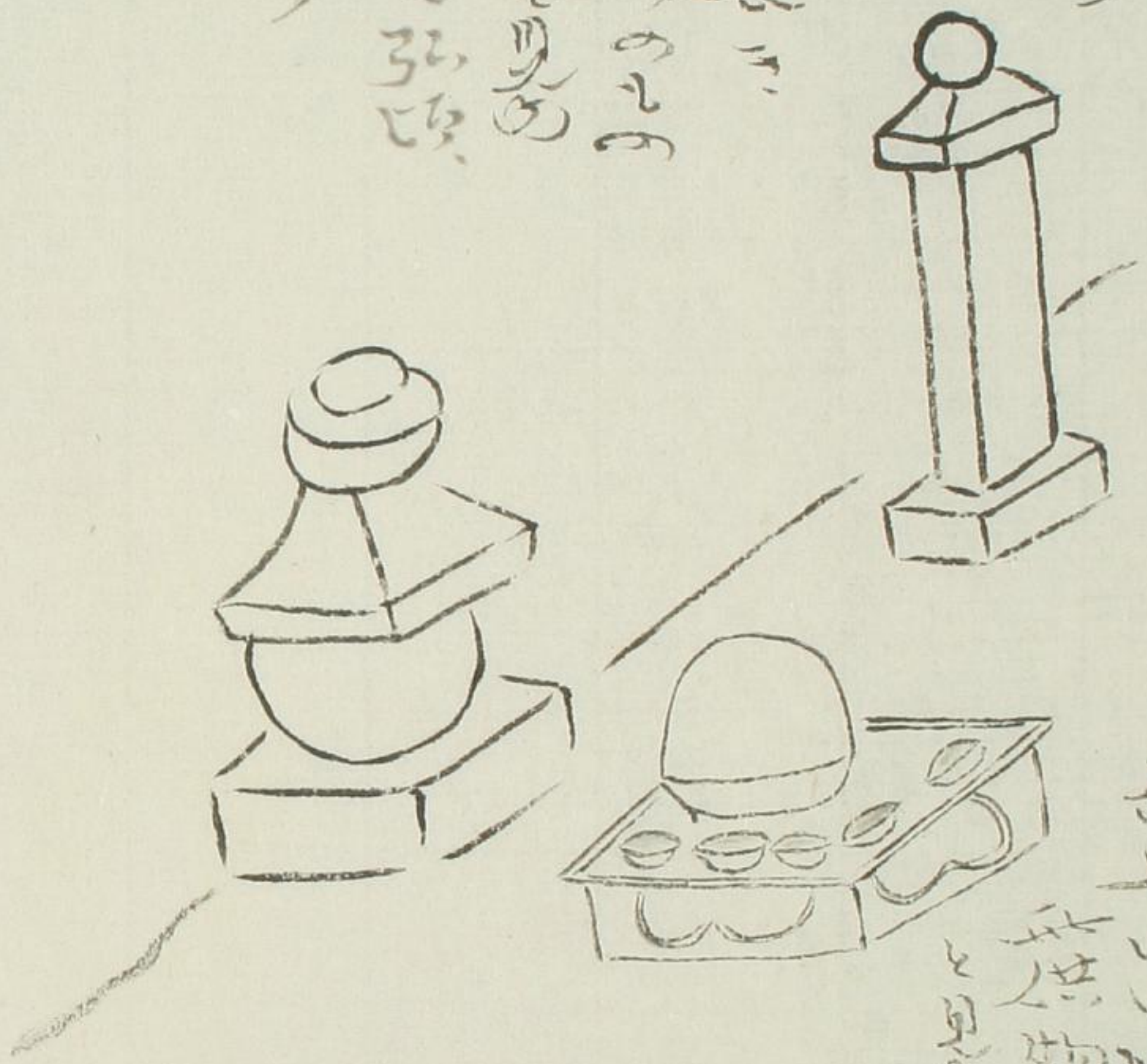


特別
45
1413
42



十景園所載
墓石

十景園
西巻の
墓石
五輪塔
の地に長三
長方形の石
ありしは夏
年式堂弘
の石



石半には婦人墓あり
其物と墓石に隔りたる
と見ゆ

か初天神

すぢの

國民道徳論
の最初の出版
年月

淨瑠璃外敷にか初天神記とくまうたは
神の社の境あり天満屋おはつた中した
せか初天神とよひなるは
に思ふ不初とよひなるは
大内書大友真鳥の文の中
うけがらわの言書
とくまうたは
とくまうたは
本邦國民道徳論と題せし
明治廿五年出版なりし
東井二哲の著書なりし
國民道徳論

向し講話とて書ありて是道徳に關し官校の如の
ものなり

赤谷金王社
為宝珠の年

赤谷金王八幡社、政の為宝珠の嘉永四年の年號

天狗草紙所圖
繪馬

天狗草紙巻物の繪、繪馬城の略圖ありて亦永
仁のこの年



繪馬城の略圖ありて亦永
仁のこの年

讀書記行

大正九年四月一日、赤谷金王社を視察し、
此方一帯をめぐり、
一、行々各處を回車す、
とて、
て、
示、
古、
め、
見、



木曾好子
不明
下

下照瓦とて名ありていふに意匠の拙なるものなり



道中道祖神の石像一名の男女の形を刻せしと見え居申
塔に見たりと此像及び馬歌石の石像と見え男女の形
像より道祖神の石像に見ゆなりと云ふの事疑ふべし

下照瓦白茅山慈雲寺鐘銘

大日本國高麗國

漢字の文字

漢字の文字

火日本國信州諏訪白峯山慈雲寺新鑄洪鐘
鐘聲動靜如響
鐘內受氣火洪叩之以火鳴發大聲叩之以小鳴發小聲如答待
問如擊鐘音清音雅若止諸妄想煩惱眼覺禪那及靜入
理尋聲聞塵清淨

應安元年以甲子月初三日
住持比丘壽山昌永謹銘
火旦那火祝普久火工萬城知盛
并緣比丘翁普良決





此鐘以文磨之
其聲如金石
其聲如金石
其聲如金石
其聲如金石
其聲如金石
其聲如金石
其聲如金石
其聲如金石
其聲如金石

德安元年
六月三日
仲夏



德安元年
六月三日
仲夏

鉄製源
近年のものは



鉄製源
近年のものは



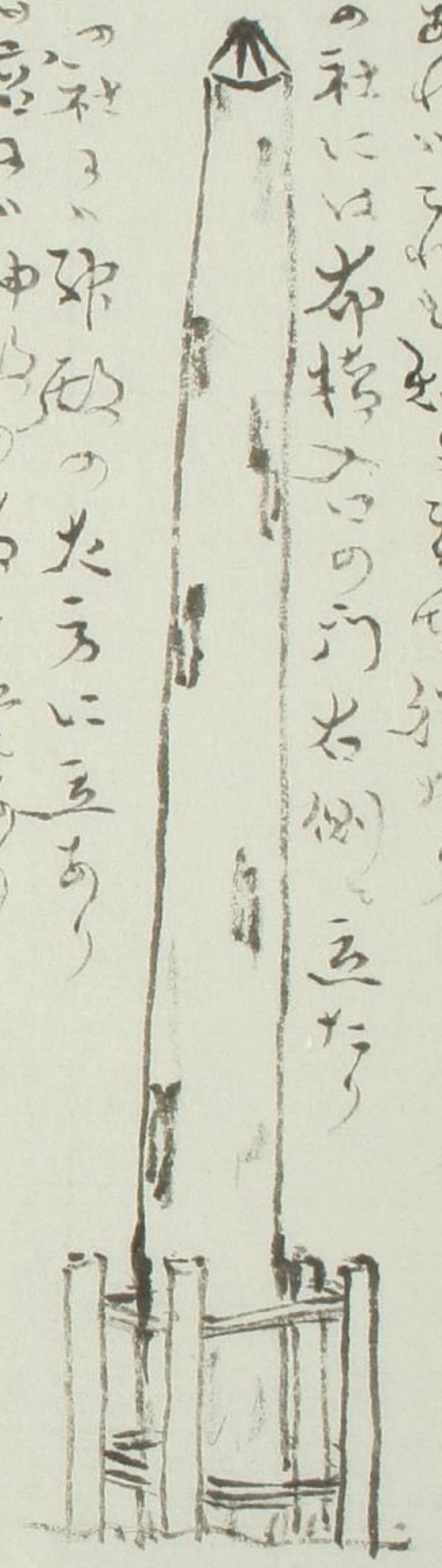
下誦訪以波令々焔龍銘
承恩の年強也



五之方



とあれがこれと云ふ事を辨かす
 この社には布指入りの門右側、五たう



下の社より神宮の大方に五たう
 春宮より神宮の右に五たうあり
 此社の皮を辨かす病氣の災を
 特近と見え、柱の皮を
 柱の長短をきく、一の柱長、二の柱長、三の柱長
 四の柱長、五の柱長と云ふ
 一の柱長をきく、理を又と云ふ
 二の柱長をきく、車輪を不用細繩にて巻く、火柱一本
 四五人の入にて一人ずつて、可を或りしと云ふ

柱の用材は樅の樹に認む
 或出す處に、東の屋の山の樅の木は里に或れて神と
 むしと云ふなりと云ふ、まはる、まはる、まはる
 天正以前、大川の材木、七年毎の造り
 あつたりしが、天正卯年より、甲午柱を或る、卯辰の柱
 のみ、換つたの、卯辰、今に至り、と云ふ、卯辰花を
 云ふが、何は、同、一、と云ふ、の長短、あま、解、せ、と云ふ
 柱、或は、信州、今、併、で、人、足、に、出、る、こと、なる、(元、か、約、前、の、定、を、)
 寺、建、築、は、海、浜、伊、那、二、郡、ま、と、又、持、し、と、なる、(同、)
 駒、馬、列、の、出、る、元、来、の、各、地、の、地、歌、が、あ、柱、或、の、人、足、を、監
 習、し、た、る、の、が、起、り、と、云、ふ、なり
 此柱の用材、此、東、の、屋、の、山、と、云、ふ、は、山、林、農、と、云、ふ、京、村、柳、次

مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل
مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل

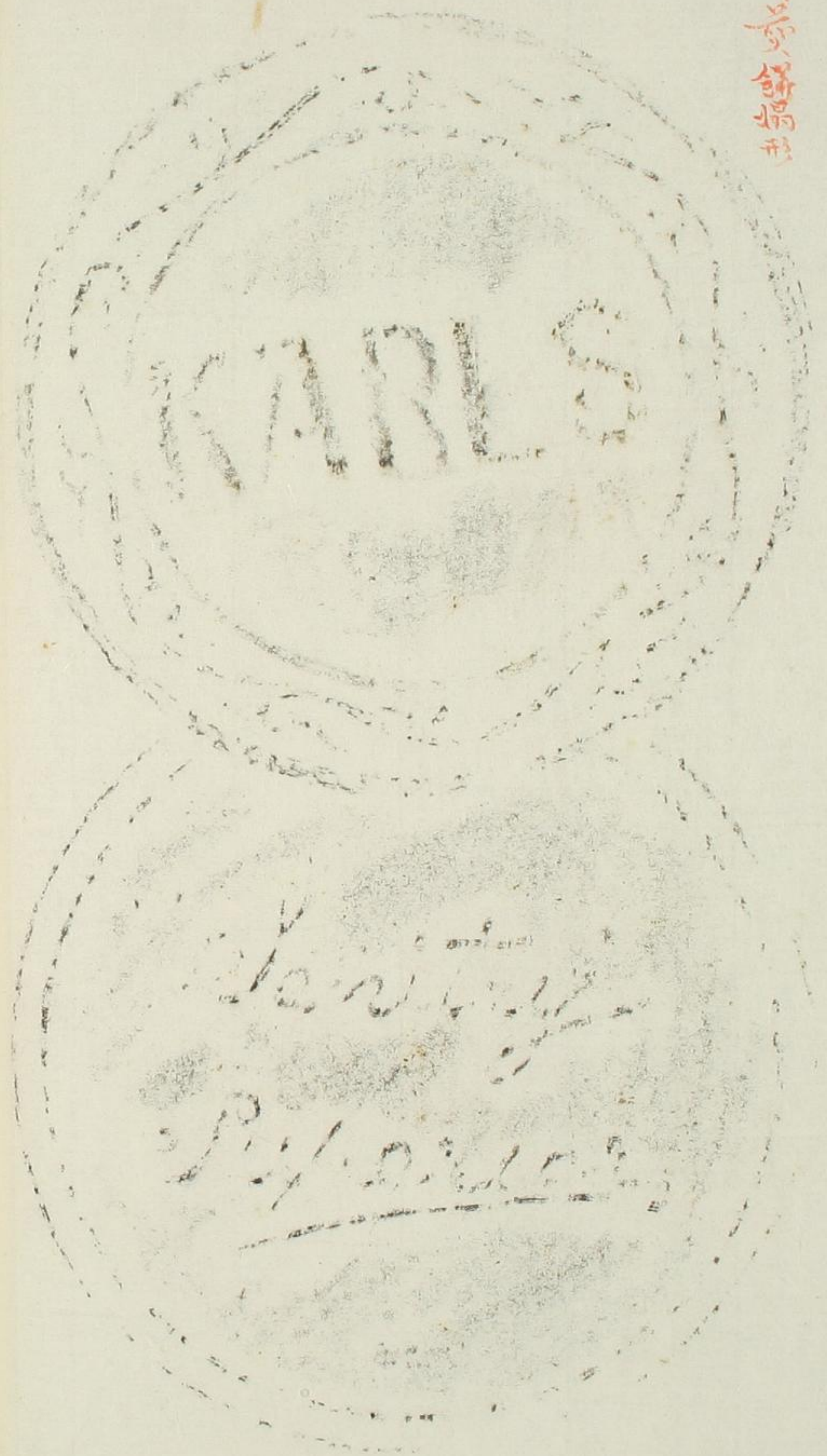
مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل

مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل

مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل

مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل

مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل



مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل

مجلسه اوله در روز پنجشنبه ۱۳۰۲ قمری در محل

草合の仕組

草合といふも 練抄に亦久草也月廿九日草合有御執
副草一とあり又 和名抄に久佐河邊世とあり草
花をもと 膝股を決すとの字と思ひしが 和名抄縁に今副
草のありしを記す先づ席上より凡をさるる 左右に別座を
かゝて花草を司の可草をかく一持出で先づ左より高座をもせ
ば右より同じ花をもし教す又右より萱竹をもし右より花より同じ
花をもして答ふ其の如く同じ花をもし右より花より又左より
右より花をもしこれにまゝとす又花をもし同じ花をもし教す
百前同し出席の人各かゝるる 花の何れの花か何れの花か定
む筆記すし花は花の如く教入あるは花をもし花をもし花をもし
とありしをさるる花の如く花をもし花をもし花をもし花をもし
の如く花をもし花をもし花をもし花をもし花をもし花をもし

草合の仕組

草合の仕組の如く花の何れの花か何れの花か定
む筆記すし花は花の如く教入あるは花をもし花をもし花をもし
とありしをさるる花の如く花をもし花をもし花をもし花をもし
の如く花をもし花をもし花をもし花をもし花をもし花をもし
り ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁
り ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁
り ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁 ち 止 保 波 仁

ぬ 奴の呉名ぬ
 留の呉名留るるなる
 意の呉名を遠の呉名
 和和わと
 草体か
 與省文と草体と
 太礼と
 禮と同字
 茶の呉名
 良の呉名

武の呉名
 字の呉名
 為の草体
 乃の呉名
 乃の
 竹の呉名
 久の呉名
 也の呉名
 未の呉名
 針の呉名
 不の呉名
 己の呉名
 衣の呉名

て「天」て「とらふ」
 あ「安」あ「あき」
 さ「左」せ「さき」
 き「幾」け「きさ」
 の「田」の「ゆめ」
 め「女」め「めい」
 み「美」み「みみ」
 し「之」し「しし」
 急「惠」の「急」
 ひ「比」の「比」
 れ「毛」れ「もも」
 せ「世」せ「せし」

す「寸」す「寸」

七子金巻

三途川

あだかぶ

あだかぶ

あだかぶ

あだかぶ

七子金巻の経堂として、
 三途川に流す力、
 あだかぶの道、
 定ちなるあだかぶ、
 の座主として、
 のりて、
 だんまり、
 苦愛に通る、

道徳の歩
かた例

現めす「叔」科の位は「新」同「女」位とせ
きたる大層の「界」も「沙」は「の」の「け」せむ古「各
向」今は「本」後「張」を「用」ひ「の」の「の」を「の」に「か」
又「の」に「て」の「取」取「の」の「の」に「て」の「取」取「の」
者「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
也「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
高「綱」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
宮「都」半「時」三「時」の「の」既「は」出「枝」の「の」
に「て」部「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
し「て」及「せ」し「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
を「ま」り「す」し「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」

ま

あ「ら」ぬ「と」も「し」ら「ぬ」
斯「す」る「は」牛「馬」の「の」者「も」其「け」た「る」に「あ」る「は」
舊「訓」に「よ」り「て」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
は「果」に「あ」る「と」も「し」ら「ぬ」
い「ふ」も「道」道「下」向「道」を「か」た「る」は「常」に「あ」る「は」
の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
室「を」た「て」て「の」計「ら」ひ「の」の「の」の「の」の「の」
前「に」禁「せ」し「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
嚴「有」強「敵」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」
然「高」也「も」て「あ」る「は」
塩「尻」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」の「の」

用
の
禁
令

種別
方敷
の

くたしなむく八枚張以上ならざる七本海がし今より下書
 一枚張十三枚張三十一枚張の枚張と枚十三枚張の増
 ていさざり寛政年の改叙の形にあり室津左とす
 手七書したる通帳をさし大用は五と唱へ一枚張目書
 七本あると書し弘め幸あり領々共し二倍し一枚張
 三十一枚張
 同書に画用枚の五本に斤鳥若浪に日の出雲に青鶴
 安永四年の改叙は青鶴雙銀字めなりと書し又雲に
 ありたりとすよらうひけり天西四年に
 燕石襦志いさう右より左の形に改し出せしと書し
 くれけのよらとすばらうのほううとすいすめ

福引の種別は風の序に記さるるに
 福引は三月の福引は昔
 はあして餅を引合てあるの多うを見て其年中の福
 引を引合てある人は種々の各代とありたり
 餅を引合てあると書し又福引と書し
 あり又福引と書しあり
 福引の種別は風の序に記さるるに
 福引は三月の福引は昔
 はあして餅を引合てあるの多うを見て其年中の福
 引を引合てある人は種々の各代とありたり
 餅を引合てあると書し又福引と書し
 あり又福引と書しあり

人形
ひりる人形
系引人形
白目人形

腕引
肩引
帯引
網引
藝盤引
又福引

素焼人形
加茂人形
毛引
鑄山用
焼土
初多
狸
胡
起

小繪櫃
おぼろ
おぼろ
おぼろ

勝杖 狸馬 猿牛 猫犬
 筋 走 油 鳥 雀 燕
 草履 蜘蛛 蛇 蜻蛉
 十不足 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 鬼 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 偏 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 紙 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛

桐梯 コラシウチ
 目隠し 鳥 雀 燕
 左 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 顔 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 紙 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 百 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 つはなぬて 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 盗人 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 橋下 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛

遊人 猿 狸 馬
 針字 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 無木 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 文 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 為世 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 こまよ 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 ねんか 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 徳れ 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 ま 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 月白 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 ちん 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛

火 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 針 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 無 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 文 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 為 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 世 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 為 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 世 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 為 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 世 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 為 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 世 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 為 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛
 世 蜘蛛 蜘蛛 蜘蛛

天台宗に改む。東叡山未だも、叡山の録録記に因しては、ロマンチックな顔面
白き物語ありと云々

境内七千坪程にて新築の本堂三所、鐘樓、鐘樓を有し、北に丘を背り、樹影蒼蒼なる
樹木を以て蔽ひ、静閑幽邃近郊の勝地なり。昔時深大寺七邑として同分寺の七
堂伽藍に勝れりとのありしやにて、中堂に法堂（法馬堂）或は掛塔板（土庫塔）
或は二王塔（三王門）或は堂山（何の堂）或は殿分（御殿）として寺の周囲七八丁に
散在すものと存つて、知らずして堂山、殿分、御殿、或は瓦の破片を出せり

口釋尊像の同質 深大寺傳來の全銅釋迦牟尼の尊像は、同創の頃
法相宗たりし時の本尊寺にて鑄造者は詳かにせざりし蓋し、静有の古佛た
り、数々埋録の契に罹り、寺廢後も古記録は、色有に歸すと雖、此の尊像の
少免也と大正三年國寶に編入され、其の朝鮮式なる点注目を要す
其他の尊像ありし者あり

- (一) 深大寺の本像 (高六尺 幅四尺 關祖滿印上人作)

- (二) 降魔大師像 (阿闍梨君の作といふ)

- (三) 深大寺發起卷物 (二卷、享保七年、藤原公平書之)

- (四) 融通念伴像記卷物 (第一卷、梶井宮亮胤親王外二人、第三卷、青蓮院
宮尊應親王外四人)

- (五) 古鏡 (永和三年の銘、刻す銘文異奇)

口古城趾 深大寺南の方一町半隔つ高さ三三十間の山にて南北一町半、東西
二町程、西は平地、續りにて堀の跡あり、城山と呼ぶ、往古清和天皇の御宇
武藏國司藤原宗郷の萬領の跡ありしを、元文の頃、上杉朝定の家臣難波
田彈正忠廣宗、松山崎の砦堡壘として城廓を構へたりと傳ふ

口青波天神 深大寺の東方三町半に在り、鎮座の時代を詳にせず、往古社地に地
ありしが、昔は佐土と社前に至りし故、斯く辨すと云ふも如何に也、武收社の
青渭神社なりと云ふも、澤井村にあるが、即ち是れなりと云ふは、恐らく青

波の家青渭に近き依りて斯る溪の起りて甲斐

口 虎栢神社 城山の南に當れり武内之虎栢神社なりと云ふ西多ノ郡根々布村に諏訪明神ありて社傳に武内虎栢神社なりと云ふは何れか是なりや

口 祇園寺 右、虎栢神社の別當なりといふ、虎栢山日光院と稱し開山は深大寺と同一く満切上人の建立を傳ふ

口 累々たる石峯 深大寺の後に當り一帯の台地は石器時代に於ける大遺跡にして新石に石峯の敷在する處見たりか曾て青波神社附近にて鳥居大野

諸氏は依りて大塚に送りしこと其他多數に接收せし者あるは打製石峯の製造場所然るべし大塚落石峯と見えり跡と見えり外なく東京近郊に斯かる多數に石峯を出せる場所他に未だ聞かず

口 布多天神 近き調布町には字上布田に布多天神とて近喜武にある古社あり考磨川にて晒す布と此の布田附近より京都に送めしものなるべし近き日毎青波言附近の災々集りて晒すに扇を用ひ調布の歌頭等布を

晒す様を為し其歌今に残りて同町字園領の少林寺太郎ト上調布の詞は傳來せり又も近き字篠原と稱する所あり斯く深大寺地方は石器時代に於て早く開けしゆゆ附近に古墳横穴板碑もあつて有史時代に亘り文化史上深く研究を要する場所なりが跡に深大寺の古伊儀と高麗人の武藏開拓との関係及び調布等の関係に於て大に注目し値するものあり

深大寺の傳説 縁起に聖武帝の御宇、栢野の里、(今の佐須と云)に右近某なる長者

あり、長者に一女あり、童子福満と云ふもの、此に逢ふれば父母これとこの里なる池の中島に居りしを、福満佛を念ひて靈亀の北に居りし、此れと逢ふを得たり父母これこそ女兒を福満と名し、一男ありて設し田舎出でて満切上人と云ふ。唐土に於て法を學びて帰朝し、天平五年、父の分誓により、水神深沙大王の社を建立せらるる事蹟を傳ふ

昔くくつめをいふ西止り車踏ハめ河に直の橋有る
此より十宗の石あり板碑天の孔孫樹の中程の枝を
さして置きたんや近所の石をたてたに其近所の石を
来りてこれに河のなかにたてしものもあらずとて
樹皮を見らば枝のたてたる木の皮の斑の如くして
白色にむくまふや枝のたてたる木の皮の斑の如くして
斑点あり木の皮の斑によるものもあらずとて
藍色の刺紙十の葉の如くあつて賞春の文ありとの
言中の文あり木の皮の斑によるものもあらずとて
北多摩郡那中多村の早稲寺に板碑あり刻せし板碑
ありとていふ

盆踊も盆踊といふこの元身精霊佛事のなまじり
出せしものもあつて愚家の司の弟の如く
待つ向の骨体にておとす中元精霊の如く
庭の提灯高提灯をたてて常の如く
の唐舞は村の男女の舞臺となり
しが盆踊りの起りや為せしにあらん其心は
唱歌の如くも佛徳を讃嘆したる如く
如きものなく其大勢の善道の清浄なり
せうたひひていふ人事なり
盆踊の記あり諸國も盆踊の如く書あり
文政八年杵高煙草の書入に後水尾院勅し
是の如くいふの傳説ありと記せしは其類の古き

とらなり又嘉永元年二庄内鶴岡あり金誦文をも
題せし元来一收揚りを集し書あり前書は情歌
多く後書は書他祝ひもあなり又は高業に寓せり
なまありて情歌少なり又岡本良石の集なり
江戸時代書誦童話にもいふの金誦文も十二集
なり其書誦大全也理誦集七段誦集
等て集す所のこれ宗教的のものにしてこれ等
皇道及び皇神の崇めざるものなり其の体
中元の格書等終極の極なり起るなり
たらし人の格書照るを知らず大なるものなり

油断

油断といふ語のなまよひなり延暦中平家物語に
供利加答の条のところに「乃軍はよもあはれに
あけて後を軍はあはれなり」とあるなり
に「油断のなまよひ星繁経に「吾も又皇如世向方其衆
満方重王勅臣持由新経申中道莫令所覆若
棄焉當断汝命復遺一人抜刀在後隨而押之
臣受王教一盡心固持經歷」とあるなり
これ油を覆せし命を断滅せしむる注意を要す
油断といふ二字はなまよひなり何やらな
まよひなり出字はなまよひなり延暦中
又の大字記をの年天子以前にありなり延暦中
新支丹出来の語をなまよひなり思ふ所なり新支丹

梅じろに火さぬ天龍川前に女高の白山寺奴谷は
萩が沢大如川鯉登り右に天神谷川の橋干橋は

高いな

角兵衛柳子の詞に「志ちやわらぢぢぢ
こひすつらんそれしくこはゆさんなるんこつと
三くも物」この文らな角兵衛柳子の詞のよ

角兵衛柳子の詞

女高の歌

女高の歌は女高の流るる下總國葛飾郡
川妻村名主の女高の歌は昔の歌は女高の
合里より来りこの村女高の歌は昔の歌は女高の
一勝概の借り来り車梁の歌は昔の歌は女高の
端な女高の歌は昔の歌は女高の

女高の歌

女高の歌は女高の流るる下總國葛飾郡
川妻村名主の女高の歌は昔の歌は女高の
合里より来りこの村女高の歌は昔の歌は女高の
一勝概の借り来り車梁の歌は昔の歌は女高の
端な女高の歌は昔の歌は女高の

女高の歌

女高の歌は女高の流るる下總國葛飾郡
川妻村名主の女高の歌は昔の歌は女高の
合里より来りこの村女高の歌は昔の歌は女高の
一勝概の借り来り車梁の歌は昔の歌は女高の
端な女高の歌は昔の歌は女高の

高野の為に... 社と... 神印を...

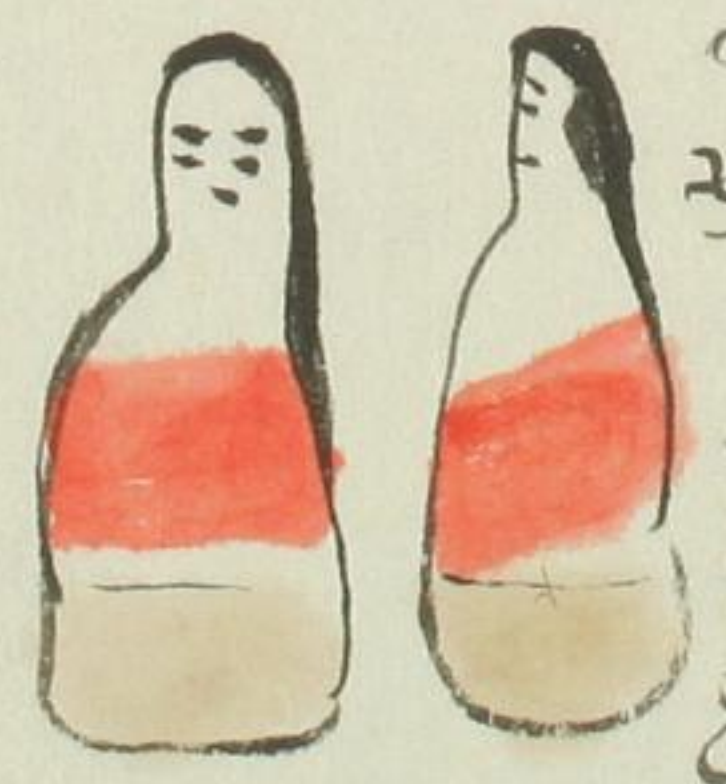
高野の社

高野の社... 高野の社... 高野の社...

高野の社

高野の社

高野の社... 高野の社... 高野の社...



高野の社

高野の社... 高野の社... 高野の社...

目黒の湯
石の世

右體之品は早々相止ぬ南定未廻り方々被作渡り
向所以有違中々相合ぬ所々相違ぬ
廿月十一日

伊東惣右衛門
井上勘助

此の湯は早々相止ぬ南定未廻り方々被作渡り
向所以有違中々相合ぬ所々相違ぬ
廿月十一日
此の湯は早々相止ぬ南定未廻り方々被作渡り
向所以有違中々相合ぬ所々相違ぬ
廿月十一日

知行抄
右に書中
の

知行抄久重を中略しと書す

書下り

一其方成格別と忍ぶ
有るは其方成格別と忍ぶ
中々相合ぬ所々相違ぬ
相違ぬ所々相違ぬ
弘治三年二月
大ニ右馬

知行抄
右に書中
の

更に於て十五及法佛の石像を以て實に慶安の年迄あり同門を以て横山に居りての山境を以て三心成りて研(里)を以て記し居りての村中職(職)に居りての境を以て七境を以ての重(重)を以てせり二は同なる年のものなり見たり七境中(中)の境代(代)を以て一は一行の火野(野)を以て二は意見(見)を以てしと同一なり三皇(皇)の故(故)碑(碑)七(七)故(故)と云々 日(日)出(出)平(平)太(太)次(次)郎(郎)

弘治三年(弘治三年)末(末)迄(迄)園(園)中(中)に(に)辰(辰)念(念)佛(佛)供(供)養(養)並(並)修(修)

天明四年(天明四年)七月(七月)十五日(十五日)

宗(宗)三(三)次(次)郎(郎)太(太)次(次)郎(郎)

此(此)一(一)枚(枚)の(の)見(見)ゆ(ゆ)の(の)もの(もの)なり
弘(弘)治(治)三(三)年(年)三(三)月(月)三(三)日(日)
此(此)一(一)枚(枚)の(の)見(見)ゆ(ゆ)の(の)もの(もの)なり
弘(弘)治(治)三(三)年(年)三(三)月(月)三(三)日(日)
此(此)一(一)枚(枚)の(の)見(見)ゆ(ゆ)の(の)もの(もの)なり
弘(弘)治(治)三(三)年(年)三(三)月(月)三(三)日(日)

石(石)神(神)井(井)村(村)月(月)持(持)の(の)古(古)碑(碑)に(に)就(就)て
月(月)見(見)と(と)い(い)ふ(ふ)月(月)持(持)と(と)い(い)ふ(ふ)者(者)は(は)異(異)なり(なり)月(月)に(に)對(對)す(す)る(る)を(を)い(い)ふ(ふ)
各(各)其(其)意(意)念(念)に(に)於(に)て(て)は(は)異(異)なり(なり)前(前)者(者)は(は)歡(歡)樂(樂)的(的)に(に)し(し)て(て)
後(後)者(者)は(は)宗(宗)教(教)的(的)な(な)り(り)本(本)邦(邦)月(月)持(持)の(の)詩(詩)歌(歌)を(を)以(以)て(て)要(要)と(と)す(す)る(る)
書(書)に(に)見(見)ゆ(ゆ)る(る)は(は)古(古)く(く)宗(宗)教(教)に(に)於(に)て(て)月(月)持(持)の(の)詩(詩)歌(歌)を(を)以(以)て(て)要(要)と(と)す(す)る(る)
之(之)鳥(鳥)田(田)忠(忠)臣(臣)の(の)集(集)を(を)始(始)て(て)見(見)ゆ(ゆ)る(る)は(は)其(其)の(の)年(年)記(記)定(定)か(か)ら(ら)ず(ず)也(也)
齊(齊)衡(衡)三(三)年(年)前(前)史(史)百(百)首(首)を(を)奉(奉)り(り)貞(貞)親(親)元(元)年(年)年(年)調(調)三(三)百(百)六(六)十(十)
首(首)を(を)奉(奉)れ(れ)る(る)は(は)家(家)集(集)の(の)月(月)注(注)に(に)見(見)え(え)ら(ら)れ(れ)る(る)時(時)代(代)
大(大)概(概)し(し)ら(ら)れ(れ)ら(ら)し(し)と(と)い(い)ふ(ふ)然(然)れ(れ)ば(ば)今(今)も(も)は(は)大(大)略(略)千(千)五(五)十(十)年(年)の(の)
前(前)を(を)中(中)秋(秋)滿(滿)月(月)を(を)賞(賞)せ(せ)り(り)と(と)い(い)ふ(ふ)も(も)あ(あ)り(り)し(し)なり(なり)
續(續)古(古)今(今)集(集)一(一)
弘(弘)治(治)三(三)年(年)三(三)月(月)三(三)日(日) 宗(宗)三(三)次(次)郎(郎)太(太)次(次)郎(郎)

辨(正)三年(元)より然し(辨)朔(り)て見(れ)か(板)好(には)文明十七年
十月二十三日の月待聖(至)并(供)巻(巻)画(像)のもの二枚(此)是(郡)三
室(寶)成(院)別(及)家(に)在(り)最(古)き(は)康(正)三年(丁)丑(月)
二十三日(月)待(供)巻(一)結(衆)数(ら)し(て)臨(三)尊(種)子(と
二)必(後)を(圖)せ(り)解(西)多(摩)郡(三)重(村)より(出)て(今)テ(二)野(の
博(物)館(館)蔵(と)な(り)ん(と)あり(康(正)三年(は)長(祿)元年(と)改(元)
あり(年)ま(て)今(ト)し(は)四(百)六(十)四(年)前(の)もの(なり)と(れ)は
康(正)三年(ト)し(て)文明十七年(と)三十年(向)月(待)あり(廿三
日)待(あり)し(を)板(好)は(よ)り(て)必(す)く(を)得(る)然(し)て
右(神)井(名)甲(の)板(好)は(此)の(ち)の(もの)に(て)必(す)く(廿三
日)待(を)成(語)方(に)行(け)り(なり)然(し)て(月)に(對)せ(り)日(二十
二)六(日)の(月)出(は)臨(三)尊(の)体(に)て(辨)せ(ら)れ(り)と(い

て(月)出(を)辨(せ)ん(と)高(基)の(也)に(集)る(こと)あり
二十三日(は)月(出)聖(至)并(供)巻(と)好(信)せ(り)
十七日(は)月(出)に(別)に(信)を(傳)へ(ん)と(觀)世(を)し(て
月)出(好)ま(り)し(こと)を(思)は(る)こと(あり)真(俗)雜(記)高(基)
抄(に)二十三日(は)大(勢)共(を)念(す)れ(ば)万(劫)の(罪)を(滅)す(十
八)日(觀)音(を)信(す)れ(ば)九(千)劫(の)罪(を)滅)す(と(この)十(八)日
觀)音(を)念(ふ)か(ら)ん(と)考(へ)る(は)十七日(待)あり(なり)ず(や)臨(三)尊(は
臨)三(尊)聖(至)を(念(ふ)こと)の(は)て(廿六)日(三)尊(廿三)日(聖)を(念(ふ)十七日
は)觀(音)を(念(ふ)は(無)き(か
周(坊)德(山)の(理)論(に)
二十三日(と)康(申)待(は)よ(り)て(わ)く(れ)よ(思)ひ(づ)ま
此(理)論(二十三日(待)の(宗)教(的)なる(を)必(す)今(も)或(る)必(る)は

から宿願を以て月々祈るあり

以て要するに月々は宗教的として是れ未だ武蔵地方に

行はれしを板碑より証するも強し

神石神井系甲の板碑の如し

月持 八月廿三日

異年 祭壇なる支子文

名必 蔵 名の字持のつら

書 研

村 祈りて者重なるを分るるを以て

早 祈りて者重なるを分るるを以て

かゝるに宿願を以て月々祈るあり

砂海濱を南の如く 俗に 父は九郎と云ふ

持ありしを西郷の如く 俗に 父は九郎と云ふ

九月廿三日 夜 佐山破レテ 岡崎健吾

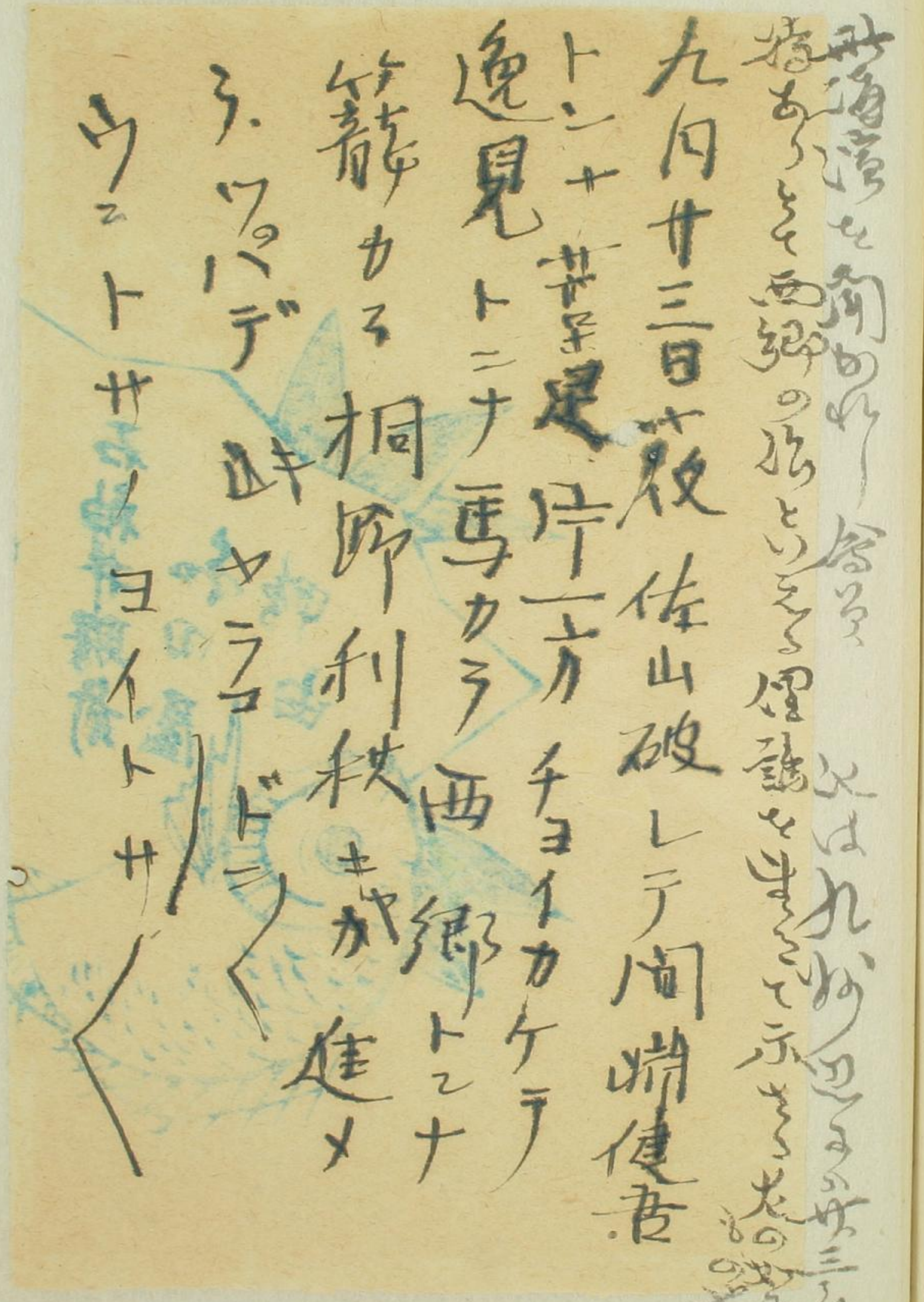
トニナ 草足 片一カチヨイカケテ

逸見 トニナ 馬カラ 西郷トニナ

竹籠 カス 桐師利秋 甚カ 建メ

3. ワバテ 時ヤラゴ ドシ

ウツト サノ ヨイトサ



Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻

Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻

Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻

Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻

Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻

Primer 第一の巻(書)の巻
Primer 第一の巻(書)の巻

久保大
目丸

島
子
木
町
文
田
竹
丸

柳
田
國
男

中
心
年
西
大
年

山
中
年
文
年
年
年

